Japanese Journal of Applied Psychology
1992, No. 17., 101-105

## アメリカの心理学教育

# アメリカの大学院について

## ——パデュー大学での留学体験から——

戸田須恵子

私が留学していた大学は，中西部インディアナ州のパデュー大学で，生徒数は大学院生も含めると約35,000人位という大規模な総合大学でした。大学は，シカゴから車で約2時間半の距離にある，ラフィエットという小さな町にあります。大学のニックネームは「ボイラーメーカー」と言い，バスケットでは比較的名前が知られている大学です。また，航空学部があるからかどうかわかりませんが，飛行場がキャンパスのすぐ隣にあります。ラフィエットの人たちは主に農業で生活を営んでおり，大学からちょっと離れると，山はなく，とうもろこし畑がはるか彼方まで延々と続いているといったところです。そのような田舎ですから，西海岸や東海岸の地方に比べると物価は安く，治安も大都会に比べてそれほど危険ではなかったようです。1986年頃，この町は，日本の自動車メーカーの導入に成功し，私がこの地を離れる1987年は，自動車工場が建設中でした。従って，今は日本の人達も非常に多いと聞いておりますが，私が留学した1982年頃は非常に少なく，研究者として来ていた人達を除くと（20人位），日本人学生は10人位でした。自動車工場誘致以前には，現地の人の中には，日本はどこにあるのかと聞く人もいました。大学のパンフレットには，全米の大学の中でも，留学生の出身国の数は多いと言う事が記してあり，国際色豊かな大学だったようです。外国人の中では台湾の人達が一番多く（約500人位），ついでインドの人達が多かったようです。気候は夏は暑く，冬は非常に寒く，マイナス30度まで下がるという，いわゆる大陸性の気候でした。

大学はいくつかの School に分かれており，さらにその下に学部（Department）があります。私は，School of Consumer Science の児童発達と家族研究学部(Child Development & Family Studies）という小さな学部に所属しておりました。この学部は四つのセクション（早期教育，児童発達，家族研究，結婚および家族治療）に分かれており，私は児童発達を専攻しておりました。修得科目に関しては，このように四つのセクションに分かれていても，同じ学部ですから，修得しなければならない単位数は同じです。しかし，内容は必須科目でも共通科目もあればそのセクションの専門科目もあり，皆一律という訳ではありません。この修得単位については，大学により，さらに学部によって異なります。私が所属していた学部は，卒業までに必要とする単位は大体95単位くらいでした（はっきりと覚えていないので）。私の友達は心理学部に属していましたが，30単位取ればいいと言っていました。このように，学部によって大きな幅があります。さらに，単位を取るのに，どの学部からも取る事ができ，それが修得単位として認められます。例えば，統計を詳しく勉強しようと思えば，統計学部(Statistrics）から単位を取ることが出来ますし，また，心理学部の教授が乳児発達のクラスを開講すれば，それを取ることも出来ました。また，他の大学へ転学の時には，その取った単位は次の大学でも計算に入れてくれるようです。しかし転学した場合，必須科目はまた取り直しをしなければならないので，余分に期間がかかるとも言えましょう。

登録した授業に出ると，セメスターの第一時間目に，教授は授業内容をプリントして学生に配布します。これを見ると，きめ細かく指導内容が記入されております。例えば，月曜日の授業だと，何月何日の授業には，第二章を講義するとか，参考文献は何を使うとかと言う風に指導計画が書かれています。これは教授の義務で，教授はそのシラバスを作るのに普段からいろいろなジャーナルなどを読んで，最新の研究をその授業の中に入れていました。Undergraduate の学生は，これを見て，科目を変更したりしていました。キャンパスの周辺には書店が4軒あり，教科書はその書店で買います。書店は大学から情報を貰って教科書を販売します。日本の生協のようなものです。本は全部が新しいものとは限りません。中古の本も数多くあります。というのは，そのセメスタ

ーが終わった後，学生は本屋へそれを売るからです。そして本屋はまたそれを次のセメスター，または翌年に売るといったように，アメリカならではの実用的方法で本を回転していたようです。このような中古本は傷み具合によって値段が違います。時には数学のような中古本を買うと，答が既に記入されていたりします。授業の中で使う文献は，すべて図書館に保管されていて，学生は，科目名とその授業で使う文献の名前を言えば，二時間の制限付きで借りられます。借りるとコピーをするなり，二時間で読んでまとめて返すなりします。また，非常に多くの文献を読ませる教授は，その文献をコピー屋に依頼して，一冊の本にして貰い，学生がコピー屋で買うといったクラスもありました。大学院の授業は，このように一回の授業に読む量は非常に多く，幾つかの授業を取っていれば，毎日が大変で，理科系と違って心理学系などはなおさらです。アメリカ人の学生すらふーふー言っている位ですから，英語圏でない外国人にとってはことばに言い表わせない苦労があります。

必須科目を終え，選択科目を殆んど終え，ある単位まで取ると，プリリムテスト（Preliminary examination）を受ける資格ができ，受験の申請を学部長に出します。この時に，自分のコミティーを３～４人決めます。このコミティーメンバーの一人は自分のアドバイザーであり，その他は自分の研究の分野に近い教授を選びます。プリリムテストは博士論文を書く資格を得るための試験で，そのやり方は学部によって違います。問題をもらってある期間に論文を書き上げる方式のもの（Take home examination）や筆記試験方式のものなどさまざまです。この Take home examination は簡単なように思えますが，ある友人はカウンセリングを勉強していましたが，プリリムテストは一週間で最低200ページのペーパーを書くテストだったそうで，死ぬ思いをしたと語っていました。このテストは大学院生活の中で，一番の難関とも言えます。このテストは何回受けてもいいかというとそうはいきません。パデュー大学では，失敗しても二回までは受験を認めていました。しかし，二回ともこのプリリムに失敗すると，その大学では論文が書けませんから，他の大学に転校するか，学部を変えてもう一度やり直すか，あるいは学校をあきらめて働くか，いずれかを選択しなければなりません。私の知っているある人は，失敗して，他の大学の他の学部へ転校しました。私の学部は比較的グループ学習が盛んで，グループの中でそれぞれ分担して情報を集め，テストまでに何回かの勉強会を持ち，テストに備えていました。

プリリムテストに合格すると卒業論文を書き始める訳ですが，まず，論文の概要（Proposal）を書いてコミティメンバーに提出します。そしてその教授達の都合の良い日を決めて，その Proposal についてコミティーメンバーの前で口頭発表をします。いろいろ尋ねられたり，手直しを求められたり，最悪の場合には書き直しという事もあります。コミティメンバーは上記に書きましたように，自分のアドバイザーも含めて３～４人の教授を選び，その教授の承認を得ます。教授の中には，多くの学生からコミティーを求められ，断る教授もあります。私の学部では，自分の研究が他学部の教授と同じ領域であれば，その教授をコミティーメンバーとして選ぶ事もできました。いろいろな教授がいますから，良く考えて選ばないと，就職の時の推薦状（Recommendation）にも影響します。他の大学で修士を終え，私の学部に入学してきた友達は，前の大学の教授の推薦状が悪かったので，半年間正式に入学出来ませんでしたし，また他の友達は，アドバイサーとうまく合わなくて，論文を書く時にアドバイサーを変えました。Proposal がパスするといよいよ研究の開始です。心理学のように人間を扱う場合には，被験者を集める前に，人権擁護に関する書類をその機関のオフィスに提出します。この書類には，実験が被験者に，身体的および心理的な害を与えないものであること等が書かれています。研究の許可が出て初めて被験者を集める事が出来ます。研究が終わり，論文を書き終えると，それをコミティーメンバーに提出し，メンバー全員の都合の良い日を選んでその発表をします。ここでパスすれば卒業できます。しかし，公式にドクターの資格が認められるためには，大学の論文審査のオフィスに論文を提出しなければなりません。このオフィスでは論文の形式を審査します。例えば，この印字の書体はダメだとか，このページの左の余白が３mm 足りないとか，ここはダブルスペースでないとダメだとか，物さしを手にしながら大学の規定にあっているか非常に細かくチェックします。指定された所を訂正し，再度審査をうけ，それでパスすれば，そのオフィスから卒業関係を扱っているオフィスへ連絡がいき，そこから卒業案内が来るという流れになっています。この論文仕上げまでの手続きは，それぞれ期日が決められており，それに間に合わなかった場合には，次回の卒業となります。私は卒業式（Commencement）に出ないつもりでいたら，友達があの帽子とガウンを着る機会は二度とないんだから出た方がいいというので，友達とかお世話になった日本人ご夫妻などを招待して出席しました。今思えば懐かしく，やはり出席して良かったと思っています。

このように大学生活は勉強に明け暮れする日々です

が，その生活を支える資金源として大学院生には，奨学金制度として Assistantship 制度があります。これは教授の研究の手伝いをして収入を得る方法で，二種類の Assistantship があります。一つは Teaching assistant (TA) で，大学生の授業の一部を教え，ティーチングの経験を持つ良い機会です。科目は一般に必須科目のようで，日本でいう心理学入門編といったところです。受講生が多かったりすると，一つの科目がいくつかに分かれ，何人かの大学院生が教えます。当時，パデュー大学の数学科では大学院生の多くは外国人でしたが，彼らが TA として教えていた時，学生から何を言っているのか英語がわからないという批判があり，大きな問題になっていました。もう一つは，Research assistant (RA) で，教授の研究の手伝いをしながら，実際にデータの集め方からコンピューターを使って分析をするなど，研究に関するいろいろな知識を学びます。この Assistantship 制度は，Quarter time から Full time まであり，殆んどの大学院生達は Quarter time（一週間に10時間働く義務がある）か，Half time（一週間に20時間働く義務がある）のAssisstantship を得て働いていました。収入金額は学部によって非常に異なります。私の学部はあまり裕福でなかったようですが，理科系の学部などは裕福で，同じ，Half time でも私の友達は沢山もらっていました。半分徒弟制度のようなこの制度は，大学院生にとっても，教授にとっても非常に都合の良い制度だと思います。その他いくつかの奨学金制度がありますが，それらは採用の人数が各学部で数人といった具合で，競争も激しいようです。この Assistantship 制度は，外国留学院生にとっては唯一の収入源です。というのは，学生ビザでは法律上働けないからです。学部生で留学しようとすれば，四年間保証できるだけのお金が必要だということです。留学先でアルバイトをしながら勉強しようという考えは，学部生では無理な話です。

このような Assistantship の制度は，教授が研究をするのに非常に好都合です。一般に教授が研究を続けて行くためには，日本と違って大学や学部は，教授のために研究費を持っていないので，何らかのグラントを取らなければ研究ができません。いろいろなグラントがあり，教授はその書類作成に多大の時間をかけているようです。なにしろ死活問題にかかわってくるのですから，必死です。金額の大きいグラントを取ると学部も潤いますし（グラントの何%かは学部の収入になるようです），教授も大学院生とか Post doctoral fellow（博士号を取得した後のインターン生）を採用でき，ますます研究ができるといったところです。ですから沢山グラントを取る教授は学部にとっても嬉しい存在なのです。教授がグラントを取り，研究を続け，ペーパーを出して業績を積むと，Tenure が取りやすくなります。

Tenure 制度は教授の終身雇用制度です。教授は最初 Assistant professor でスタートし，何年後かにこの Tenure の審査があります。大学によってその年数は様々ですが，パデュー大学では大体7年目に審査があったようです。この審査では，ペーパーをどのぐらい出版し，活躍しているかということを見る他に，Community への貢献度，その教授の評判や普段の行動なども審査の対象になるようです。私の学部では，私が在籍していた間に二人の教授が Tenure を取ることが出来ませんでした。一人の教授は，業績は沢山あったそうですが，いわゆるセクハラ問題を起こし，他の大学へ移りました。もう一人の教授は，丁度離婚問題をかかえており，その間クラスに出なかったり，会議にも出席しなかったなど，学校の勤務を怠った，というのが理由だったようです。Tenure が取れなかった場合，その教授だけでなく，その教授についている大学院生にとっても不幸です。大学院生のなかには，自分のアドバイザーが他の大学に移るとき一緒に移って行ったりします。勿論，一緒に移って行かないで，他の教授に変えればいいのですが，実験の途中だったりする状況にあると，やはり一緒に移るようです。Tenure が取れた教授は Associate professor に昇格します。またその時，サバティカル (Sabbatical) を取る権利も得られるようです。勿論，その大学に定年まで在職できることになります。ですから Assistant professor は Tenure を取るために必死で研究し，ペーパーを出しているのです。ある人が言うのには，Tenure が取れた後，教授は二つのタイプに分かれるそうです。一つのタイプは，あまりガツガツ働かないで，自分のペースでゆっくり研究して行く人で，もう一つのタイプは，そのままのペースでバリバリと研究を続けて行く人だそうです。Associate から Full professor になる時には，その教授が候補者として志願するようです。応募の時にはそれ相当の業績が必要です。業績が少なければ学部長の方から，ちょっと業績が少ないから応募は見合わすように等と言った助言があると聞きました。また，応募の時には，推薦書を沢山の人から集めなければならないようで，ある教授は，世界のあちこちから推薦書を集めていました。そしてその中から良く書けている推薦書を選んで規定数だけ出すのだ，と話していました。勿論，私の話はパデュー大学での話で，他の大学では他の規定があるかもしれません。また，各スクールの部長も公募によって募集されます。部長はその応募先の大学

で，自分の研究を発表しなければなりません。選考の基準は，要因の一つ，業績は勿論のこと，グラントを沢山取る能力も重要なんだと友達が話していました。

さて，心理学系の学生が大学院を修了すると，大学の Assistant professor のポストに応募するか，または，Post doctoral fellow として職を得るかが殆どです。しかし，中には組織心理学といったような分野の学生は，会社に入社したりするケースもあるようです。私が一緒に住んでいたルームメイトは，保険会社を応募していました。また，中には研究所などに就職する人もいます。しかし，理科系などの学生は，会社の研究所へ就職するケースが非常に多いようです。私は化学を専攻していたポルトリコの友達の卒業パーティに出た時，彼女のアドバイサーが，今まで卒業した彼の学生の中で，彼女が最初のアカデミーの仕事に就く人だと言って喜んでいました。皆給料の高い会社へ就職してしまうらしいのです。彼女は今，ポルトリコの大学で化学を教えています。Post doctoral fellow というのは，いわゆるインターン生のことです。クリニックの領域では義務づけられていますが，その他の心理学系の学生は義務づけられていません。しかし，心理学系の学生の大部分は，インターン生として大体１～３年間（それ以上長い人もいます）働き，その後で Assistant professor の職を求めるようです。この教員募集は日本と違い，すべて公募によって採用されます。この採用の条件はやはり業績です。ですから大規模な大学に就職しようと思えば，大学卒業直後では業績が少ないので，競争に勝つのは難しく，殆んどの人はまずインターン生として就職し，その間業績づくりに専心するようです。就職先を見つける方法は，APA のモニター新聞などから候補校を見つけ，適当と思われるすべての大学に書類を送っているようです。私の友達は30校以上出したと言っていました。

大学側（学部）は，多くの志願者の中から，その業績などを見て候補者を一人か二人決めます。そして第一候補者からまず大学に招待し，インタビューを行います。私の学部では，二日かけて候補者を審査します。まず候補者は学部の教授や大学院生の前で研究発表を行い，審査する側は，候補者の研究知識や発表の仕方などを観察します。さらに学生はその候補者と一緒に昼食し，直接話す機会が与えられます。また教授達もそのような機会を持ち，また夕方にはパーティを持ったりして，二日間その候補者を十分観察します。学生の意見も取り入れられて，結果が２，３日中に出されます。もし，その人が適していない場合には，第二候補者を同じ手続きで審査します。時には，二人の候補者が有力と見られれば，一人を招待した後，引き続いてもう一人を招待し，その後で結論を出すという事も行われます。しかし，経費の関係で応募者全員に対してインタビューする訳ではありません。その時に適当な候補者がみつからなかった時には，もう一度公示するようです。ポストが埋まるまでずっと募集しますという広告を APA モニターで時々見かけることがあります。

日本の就職事情と違い，候補者は，このように人前で発表して試されるのですが，この発表のスキルは，個人差もさることながら，普段の Teaching assistant として学生に教える経験や，クラス発表などを通して経験を積むようです。Undergraduate の学生でも，クラスで発表するとなると，普段のＴシャツとジーンズとは裏腹に，パリッと背広を来てきて発表するので，何となくおかしい気持ちでした。彼らにしてみれば，発表の評価は内容のみならず，外観からも良い評価を得ようというねらいがあるのでしょう。また，他の面から考えると，アメリカ人はこのようにチャンスを捉えて，人前で話す訓練をしているとも考えられます。

このように大学院生活は勉強あるいは研究の基礎づくりの期間ですが，大学側も学生に勉強してもらうような環境を作っているようです。例えば，日本と違って羨ましいのは，図書館です。私が入学した頃は，大学の図書館は午前２時まで開館していました。一年後，12時までとなりましたが，それでもこんなに遅く開いているのは学生にとって大いに助かります。また各スクール毎にも図書館があり，各図書館はそれぞれの専門書を大学の図書館より多く揃えていました。勿論，同じ本がいくつかの図書館にあったりします。しかし，日本の大学の図書館に比べて蔵書の数は非常に多いように思いますし，学生も非常によく利用しています。これらの図書館は，各スクールによって異なりますが，大体10時頃に閉館になります。この遅い時間の係員は，Undergraduate のアルバイト学生が殆どです。その他，24時間利用できる勉強室もあり，セメスター中はいつも学生で一杯でした。勿論，この部屋は大学院生だけでなく，Undergraduate の学生も一緒ですからうるさい時もありますが，しかし彼らは良く勉強します。宿題が沢山でるので大変なようですが，友達と一緒に勉強したりして，何とか落第しないように頑張っていたようです。教授達もテストについては，一回のテストで落第しないようにという配慮なのか，セメスター中に数回テストを行い，中には出欠をとり，宿題の提出を求めたりして総合で成績をつけているようでした。ですから Undergraduate の学生は，勉強するのに図書館をフルに活用していたように思います。

Undergraduate の学生だけでなく，大学院生にとっても，金曜日は何となくホッとする日です。金曜日になるとバーに行ったり，パーティを開いたりしてとても賑やかです。キャンパスのそばにチョコレートショップというバーがありましたが，金曜日の夕方になると，いつも席の空き待ちで長い行列が出来ていました。このチョコレートショップという名前は，アル・カポネ時代の名残だそうで，その当時，表でチョコレートなどを販売し，実は裏で飲み屋をやっていたということで，店の名前がそのまま残っているのだそうです。金曜日はどこのバーも学生で満員でした。しかし，州によって酒を飲んでいい年齢が異なり，バーでは，時々身分証明書の提示を求めます（学校の身分証明書は年齢が書いてないので，普通ドライバーライセンスを見せる）。いくら大学生でも20歳になっていなければ店へ入れてくれません。日本の大学院生で，彼は他の友達と飲みに行き，身分証明書の提示を求められ，大学院生だと言っても認めてくれず，その時は酒が飲めなかったとの事（彼はちょっと若く見える顔立ちをしていました），そこでドライバーライセンスを取ったのだと話していました。

以上，アメリカの大学院の教育について簡単にまとめました。ラフィエットの町は何もないところでしたが，ちょっと車を走らせるとカヌーが出来る川があったり，隣町にシカゴという大都会がありました。また，月に一回か二回位コンサートやその他芸術的な催しなど，外部から招待して定期的に行っていたようです。外国人が多かったので，International 的な催しも盛んでした。特に Food festival は，いろいろな国の食べ物が販売され，私の楽しみの一つでした。その当時は大変苦労したように思いましたが，今振り返ってみればすべてが懐かしく思い出されます。